土曜の午後

霧雨が小雨に変わる頃、それが遮られた。
「頑張ったね、明日香ちゃん 」
「……うん。すごく……恥ずかしかったもん、こんなこと…… 」
「でも、よく頑張ったね。明日香ちゃん、やっぱり無理やりされても気持ち良くなんかなれないんだよ 」
「え……あ、うん。そう……だよ。あたし、恥ずかしくってそれどころじゃなかったもん……。だから…… 」
「信じるよ。明日香ちゃんのこと…… 」
おそるおそる隆を覗き込むと、彼は笑顔を返してくれた。
肩の荷が下りた気がした。騙すようで気が引けるけれど、隆への気持ちは真実だと信じている。だから、過程がどうあれ確執が溶けて消えたのであればそれで良い。
仮に誰かに裸を見られる非日常によるドキドキ感があっても、他の男子のオチンチンを見ることができて新鮮な気持ちになれたとしても……。
「寒かったろ？ すぐ送っていくよ 」
「うん、ありがとう 」
カッパを脱ぎ、服を着ようとしてやめる。身体が濡れており、服が汚れそうで嫌だ。荷物から体操着を取りだし、着替える。外からも見えてしまうけれど先ほどの露出に比べれば全然ドキドキしない。
「…… 」
「どうしたの？ 先生 」
着替える途中、隆と視線があった。彼はサイドレバーに手を掛けたまましばらく待っていた。
「いや、何でもないよ。それよりシートベルト 」
「あ、はーい 」
シートベルトをしていなかったから車を出せなかったのだろう。明日香はベルトをしめると荷物を抱えた。
すぐに車は走りだし、グラウンドから遠ざかっていった……。

＋＋

初戦を勝利で飾った昭利は笑顔で家路に着いた。
得点できたことと勝利、そして次の試合での参加を約束してもらえた。
そして何より、ゴールの瞬間を明日香に見てもらえた。

自分が今日まで頑張ってきたこと。その成果を明らかな形で示せたことが嬉しかった。
来週の月曜日にはそのことで話をしたい。褒めてもらいたいという気持ちもあるけれど、まずはきっかけが大切だ。だから……。
「あら、何してるの？　こんな雨の中、傘も差さないで……。いくらあんたでも風邪ひくわよ？」
そんな気持ちに水を差したのは綾子の声。とはいえ、今日の試合に明日香が来てくれることを教えてくれたのも彼女。無下にすることもできなかった。
「なんだよ、お前かよ」
昼は私服姿だったが、今は体操着姿。何か着替える理由があったものかと首を傾げるも思いつかない。かといってそれほど興味があるわけでもなく、聞く気にもならなかった……が、気にならないと言えば嘘になる部分もある……。
「なんだとは失礼ね。そんな態度して良いのかしら？」
「別にいいだろ。お前が思うようなことは何もないんだからな。今日だって明日香は試合に来てくれたんだ。ちゃんと俺がゴールしたところ見てもらったしな」
「へぇ、サッカーの。あら、変ね……。吉岡君は……」
「雄二がどうかしたのか？」
「ええ、今日試合ならどうして体育館に居たのかしらと思って」
「体育館？　なんか今日あったか？　ったく、試合だってのにさぼりやがって……」
さぼりに対してはむっとくる。けれど、彼が居ないおかげで試合運びが良くなった。このまま来ない方が展望も明るいのかもしれないが……。
「んで？　なんか用か？」
「そっちこそ。何か言うことないの？」
「何が？」
今一つ要領を得ない綾子の態度に首を傾げる。雨の中、傘を差しながら体操着姿で居る彼女。気になるところと言えば、胸元ぐらい。
生意気なおっぱいは明日香のそれより大きく、サイズが小さいせいか形がよくわかる。そしてぷくっと立った乳首。普段ならブラジャーをしているはずなのに、今日はしていない。最近は女の子の身体を気にしてしまう気持ちが強く、スケベと思いつつも見てしまう。
「ふふん……」
それを見透かされてまた嗤われる。触ったらきっと恥ずかしがるくせに、なぜこうも強気の上から目線なのか……。
「どうしたの？　昭利、顔が赤いわよ。うふふ」
気付いている。自分がノーブラで、昭利がそれに気づいたことに……。
「なんでもねーよ。用が無いなら帰れよ……」
「あら、雨なんだし傘に入れてあげるわよ。どうせすぐ近くだし」
綾子は昭利の腕を取ると強引に傘に入れる。それは親切などというものではなく、あく

までも彼をからかう嫌がらせ。それをわかっているからこそ、昭利は彼女が苦手だった。
「ふふ、照れちゃって……」
「誰も照れてねーよ。ったく、放せよ」
「いいじゃない。誰も見てないし……、あら？」
遠くを走る車に目を走らせる綾子。それほど目が良くないのかごしごしと擦る。
「ねぇ、今の車って志垣先生のじゃない？」
「え？　そうか？」
言われて思い出すと彼女の言うとおりだった。今日は土曜でもう良い時間帯。隆が帰っていたとしても何も不思議ではない。だが、家は別方向と聞いており、商店街からも遠いこちらに来る理由がわからない。
「ふーん、ま、いいわ……」
「いいのかよ」
大したことないだろうとすぐに切り替え、それよりも誰かに見られない内に分かれ道へ行こうと昭利は大股開きで歩いた。
「ちょっと待ちなさいよ。女の子の足に合わせないと嫌われるわよ？」
「お前に嫌われたってへでもねーよ」
「全く素直じゃないんだから……」
「素直だから本音を言えるんです～」
「ふふ、子供っぽい奴ね」
「ったく、減らず口ばっかりだな」
「お互い様よ……」
挑む様な笑顔でくすくす笑う綾子。普段がこの程度なら少し美人で生意気な同級生なのにと残念に思う。もっとも、彼女と出会う前からの繋がりのある大切な人が居るのだから、彼女の場所は無い……。
「昭利……」
「？　呼んだか？」
「わたしが？　自意識過剰よ」
「だって今……」
「昭利……なんで中倉産と居るの？」
「え？　……あ」
声の主は明日香だった。
「おや、中村君に中倉さん。どうしたんだい？　こんな時間に、こんな場所で……」
そして志垣隆。どうしてこのタイミングで顔を合わせるのか？　そして自分に向けられる明日香の視線。彼女は綾子を敵対視しているし、綾子もこういう時に限って積極的に悪ふざけをする……。
「ええ、昭利が傘無いっていうから一緒に帰ってたのよ。ね、昭利」

これ見よがしに笑顔で腕を取る綾子。その仕草はいかにも友達以上で、誘惑するかのように胸を腕に当てて来る。
これが二人だけなら嬉しいけれど、今は明日香の視線にさらされている。
「ふーん、中村君は中倉さんと仲が良かったんだね。てっきり沢森さんとだと思ったけど……」
そして余計なひと言を続ける隆。昭利はどうにも都合が悪い状況に天を仰ぐ。
「いや、これはその……たまたま偶然で……」
「偶然で一緒に居るの？　なんで？　中倉さん、それになんで体操着なの？　昭利のせい？」
「おいおい、明日香、変なこと言うなよ。こいつはただ……そういやなんでだ？」
「今日はバレーボールがあったのよ。ま、今日で辞めたけどね」
「なんだよそれ。ったく、都会の奴は根性無いな」
「だって、土曜日に練習があると昭利の試合の応援に行けないでしょ？　だーかーら、思い切ってやめたの」
「な……」
「へぇ、中倉さんは中村君と仲が良いんだね。知らなかったよ」
「……そうなの？　昭利……」
明日香の綾子に対する視線は鋭く険しい。それに気づいているのか、綾子も見せつけるように昭利にくっつく。
「やめろって。離れろよ……」
「いいじゃない。昭利。あたし達の仲でしょ？」
「何が仲だよ。何も無いだろ」
「ふうん、キスしたのに？　あれ、遊びだったのかしら？」
「なっ……おま……」
「へぇ、二人とも進んでるね」
「キ……キスって……なんで？　昭利、あんた……」
綾子の言葉に強張る明日香と笑顔を向ける隆。
「うん、二人が仲が良いことは良い事だよ。ただ、あんまり学校では見せつけすぎないでくれよ？　そういうの嫉妬しちゃう人とか居るからね」
「はい、気を付けます。さっきから怖い目で見てくる人いますし……」
ちらりと明日香を見るも、その視線の理由は複雑。思ったような反応が見えないことに綾子は訝しむ。
「でも、先生と沢森さんも仲がよろしいですね」
「ん？　そうかい？　そりゃクラスの担任だしね。できるだけ仲良くしていたいよ」
「生徒と教師でですか？」
「そんなの関係無いもん」

「そうかしら？　年齢差のあるカップルなんて珍しいし……　」
「なによ、何が言いたいの！　」
「おい、明日香……、なに怒ってるんだよ。それに綾子も変なこと言うなって……　」
妙な雰囲気を察して二人を宥める昭利。けれど、そんな仲裁などどこふく風。二人とも視線を交わし引く様子が無い。
「あはは、そう見えたかい？　うーん、僕もまだまだ若いってことでいいのかな？　」
「はは、先生と明日香じゃ年齢以外にも釣り合わないだろ……。そんなこと、あるわけねーよ……はは　」
「そうかしら？　沢森さん、最近女らしい身体付きになってるし、身体だけなら釣り合うんじゃないかしら？　」
「ちょっと、それどういう意味よ……、まるで身体だけってこと？　」
「さあ？　どうかしらね……　」
「あんたこそ、身体ばっかり大きくなってるだけじゃない　」
「それは女らしいって意味かしら？　褒め言葉として受け取っとくわ　」
「あんたねぇ……　」
「おい綾子、やめろよ。ふざけると俺も怒るぞ　」
「あらあら、沢森さんには優しいのね。二人とも……　」
「うーん、そういうつもりじゃないんだけど、僕としては皆に仲良くしてほしいし　」
「失礼しますね、ほら、帰るわよ、昭利　」
「なんでだよ。一人で帰れよ　」
「いいじゃない。雨降ってるんだし、風邪ひくわよ　」
「俺は明日香と……　」
「沢森さんこそ一人で帰るんでしょ？　」
「……おい、明日香、帰ろうぜ　」
「……いい、一人で帰る……　」
「おい、明日香……なに拗ねてるんだよ　」
「拗ねてなんて無いもん。昭利のバカ！　裏切り者！　」
「な、裏切り者って……　」
叫び、駆け出していく明日香に昭利は追いすがろうとする。けれど、腕を綾子に取られて差は広がるばかり。
「離せよ　」
「放したいわよ。けど、絡まって……ちょっと止まりなさいよ　」
わざとではなく鞄の紐が絡まっており、綾子も珍しく焦り紐をほどく。
「おい、早くしろよ　」
「ちょっと待ってってば……もう……　」
「あれ？　明日香……　」

曲がり角を曲がった先ではもう明日香が居ない。彼女も足は速いけれど、そこまでとは思えない。どこかに隠れたにしても駐車場や空き地ばかりで隠れる場所など無い。
「おかしいな……。明日香――！！」
「……どこへ行ったのかしら……」
二人は小雨の中、煙のように消えた明日香を探してうろうろする。
誰かの家の庭先に隠れたのか、それとも車の影か？　しかし、どこにも誰も居ない。
「おーい、中村君、中倉さん、どうしたんだい？　急に走り出して……」
「それが……明日香が……見失って」
「沢森さんなら心配ないよ。地元なんだし、君らの知らない場所を通って帰ったんじゃないかな？」
「そんな、なんでそんなこと……」
「それはやっぱり、中村君が中倉さんと仲良くしているからじゃないかい？　ほら、沢森さんは中村君と仲が良かったし」
「……そんなことは……」
「そうかしら？　あたしはてっきり先生と仲が良いと思ってたけど？」
「ははは、そう見えるかい？　嬉しいな」
しつこく問い直す綾子に隆は余裕の表情で笑い返す。
「ええ。志垣先生、沢森さんのことを車で送って居ませんでした？」
「ん？　そんなことは無いよ。勘違いじゃないかい？」
「でも、先生と沢森さん、同じ消臭剤の匂いがしましたよ」
「おい、綾子、何言ってるんだよ。そんなことあるわけ……、だって、ほら、お前、この村の店の数知ってるだろ？　消臭剤なんて気の利いたもんはシンチョウルのレモンだけだぞ？　皆同じもん使ってるんだよ」
「……ふーん、そうかしら？」
「中倉さんは鋭いね。まるで探偵みたいだ」
「そうなんですよ。こいつ、なんか村のこと気になるって言って……」
「昭利、帰るわよ。志垣先生、さようなら。沢森さんには失礼なことを言って悪かったと思います。今度、謝りたいと思いますので、よかったらそういう風に伝えて欲しいです」
昭利の言葉を遮り、頭を下げる綾子。隆もそれに頷くので、これ以上面倒なことをしたくないと昭利も蒸し返さない。きっと探偵ごっこをしていることを隆に知られるのが子供っぽくて恥ずかしいからだと思って……。
「うん、わかった。沢森さんにはそう伝えておくよ。それじゃあね。また月曜日……」
「はい、さようなら……」
「いこ、昭利……」
「ひっぱるなよ……」
腕を引っ張る綾子はいつになく早足で昭利が慌てる程だった。

しばらく歩いて曲がり角に隠れた辺りで背後を見る。誰も居ない。
「なんだよ、急に 」
「あのねえ、あたしがこの村を調べてるのは秘密にしなさいよ 」
「なんだよ、恥ずかしいのか？ 探偵ごっこが 」
「そうよ。そう思ってくれていいわ。とにかく学校関係者にも知られたくないのよ。貴方も見たでしょ？ 準備室の…… 」
指で四角を作る仕草に昭利も彼女の言わんとすることを察する。
「お前、志垣先生のことも疑ってるの？ 先生は真面目な人だぞ 」
「貴方はわからないでしょうね。でも、あたしにはわかるわ。あの人も変よ 」
「なんだよ、何が変なんだ？ 」
「ねえ、昭利、あたしが今日ノーブラだって気付いてる？ 」
「な……何をいきなり…… 」
「気付いてたんだ。エッチ 」
「しょうがないだろ……。気になるし…… 」
「志垣先生、ずっと見てたし 」
「何を……え？ 嘘だ……。そんなこと……。男なら……そうなんじゃ…… 」
「生徒のおっぱいをじろじろ見て笑顔なのがまともかしら？ 百歩譲って昭利と同じスケベならともかく、教師のやることじゃないわ 」
「…… 」
綾子の言うことにも多少の理はあり、一方で疑う理由として弱くも感じる。普段から教室で顔を合わせて指導を受けている昭利からすると彼女の言うことをうのみにすることがしたくなかった。
「そんなこと、あるわけ…… 」
「昭利は見たくないモノを避けようとしてるだけよ 」
「だって、お前はこの村の人間じゃないし…… 」
「それを言ったら志垣先生だってそうでしょ？ 鬼瓦に赴任してどれぐらい？ １０年も居ないでしょ？ 昭利に比べたらずっと短い……。アタシとそう変わらないわ 」
「……それは、そうだけど 」
「いわゆる正常性バイアスよ。昭利、あんた沢森さんのこと気にならなかったの？ 」
「お前が挑発しまくって切れてたじゃねーか…… 」
「嫉妬だとでも思ってるのかしら？ おめでたい人ね 」
「あのなあ、お前だってキスなんて余計なこと言うなよな！ 」
「いいじゃない。事実なんだし…… 」
「このやろう 」
「…… 」
「？ 」

遠くで車の音がした。
「なんだよ、急に 」
「いえ、別に？　それより志垣先生、ここまで何で来たのかしら？ 」
「え？　それは…… 」
小雨の中、傘も差さずに居た先生。服はそれほど濡れておらず……。
「そもそも、何しに来たの？ 」
土曜の午後、鬼瓦の住宅群に来る理由があるのは……？
「…… 」
「いたずらに信用するのは自分を騙す行為よ 」
「……なんだよ、それ 」
おかしいことはいくつかある。それを見たくないと思うのは心の防衛本能なのかもしれない。けれど、少しずつ積み上がる事実が昭利を暗い気持ちにさせた……。